

複合的資源管理型漁業促進対策事業（概要）

海洋資源科 明 神 寿 彦

1 目的

キンメダイを対象に、漁業実態、資源生態を把握する調査を行い、漁業者が持続的、安定的に資源を利用していくための方策の提示に必要となる基礎資料を収集する。本事業については、別途報告書が作成されているので、ここでは概要にとどめる。

2 調査結果

漁獲量 図1に室戸漁協における水揚げ量を示した。本県沖でのキンメダイ漁業は1976年に始まり、1982年までの漁獲量は1977年を除けばごくわずかであった。その後、水揚げ量は漁獲努力量の増大、新漁場の開発などによって急激に伸び、1989年には1500トンに達した。1990、1991年は800～900トン程度に落ち込んだものの、1992～1995年は1100トン程度の安定した漁獲がみられた。1996～1999年は再び減少し700～900トンとなったが、2000年以降は1000トン台を回復し1992～1995年を上回る好調な水揚げが続いている。

銘柄別漁獲量 室戸漁協の銘柄の体重区分は、「特大」が1.5kg以上、「大」が1.0～1.5kg、「小」が0.6～1.0kg、「小小」が0.4～0.6kg、「ビリ」が0.4kg未満である。ただし、1999年8月までは1.0kg以上は一括して「並」とされていた。「並」の漁獲量は、1992～1995年が800～900トン、1996～1999年は600トン程度であったが、その後増加し、2000年は1003トン（「特大」418トン、「大」585トン）、2001年は934トン（「特大」388トン、「大」546トン）、2002年は830トン（「特大」307トン、「大」523トン）で、高水準で推移している。「小」は、1989年の約600トンを除けば、2001年までは200～300トンで推移し、安定した漁獲がみられていたが、2002年は急激に増加し約600トンとなった。「小小」の漁獲量は少なく2000年までおおむね10～30トンで推移していたが、2001、2002年は60ト

ン程度まで増加した。「ビリ」は、小型魚ねらいの操業がほとんど行われていないことから、漁獲量そのものは少なく2000年の約2トンが最高であるが、漁獲のピークが1990年、1995年、2000年と5年ごとにくることが注目される。

CPUEの変動 樽流し漁業全体の1日1隻あたりの水揚げ量（CPUE）は、1990年の約150kgから1992年の190kgまで増加し、その後1995年までは170～190kgで推移していたが、1996～1999年は140～150kgに低下した。2000年以降は200kgを超え高水準で推移している。漁場別の動向は次のとおりである。大正礁は最大の漁獲があることから樽流し漁業全体とほぼ同じ動向を示した。サウス山は1990～2000年は100～140kgで比較的安定していたが、2001年に過去最高の176kgに急増し、2002年はこれをさらに上回り206kgとなった。新礁は、1994年に31kg、1995、2001年は250kgを示し、4漁場の中では変動が一番大きい。近年は高い値を示している。足摺海丘は、4漁場のうちで最も高い値を示し、比較的安定して推移している。

標識魚の再捕 これまでに他県で放流され、本県海域で再捕されたものは15個体あるが、それらすべてが1998年以降に再捕され、そのうち13個体が2000年以降に集中して再捕されている。

室戸漁協に水揚げされたキンメダイの体長組成 図2に室戸漁協に水揚げされたキンメダイの体長組成を示した。1996年までについては、体長測定が継続して行われていなかったのここには示していない。体長組成の分布形は、1998年と1999年とはよく似ているが、この両年とは若干異なっている。しかし、漁獲尾数はこれら3年間ともほぼ同程度であり、また、ほとんどが30cm以上のもので占められている。1999年には漁獲尾数は極めて少ないものの21cm（「ビリ」に相当）にモードが出現し、このモードは、2000年の26cm

（「小小」に相当）、2001 年の 28cm（「小小」に相当）、そして 2002 年の 31cm（「小」に相当）に移った。また、2000 年以降およそ 35cm 以上のキンメダイがそれまでに比べ増加している。

2000年以降の好漁要因 標識放流魚の再捕結果、前年に報告した 2000 年 11、12 月の CPUE の変動から判断して、大型魚の好漁要因は、関東方面のキンメダイが日本の南岸沿いに西進し、本県海域に来遊してきた結果、本県海域での資源量が増加

したためであると想像される。また、図 2 の小型魚のモードの移行は、耳石を観察して得られたキンメダイの成長と一致することから、これらのモードを持つキンメダイは 1997 年に産まれたものと考えられる。したがって、2001、2002 年の「小小」及び「小」の漁獲量の急増は、1997 年級群の資源量が高水準であったためであり、そしてそれが漁獲対象となってきたためと考えられる。

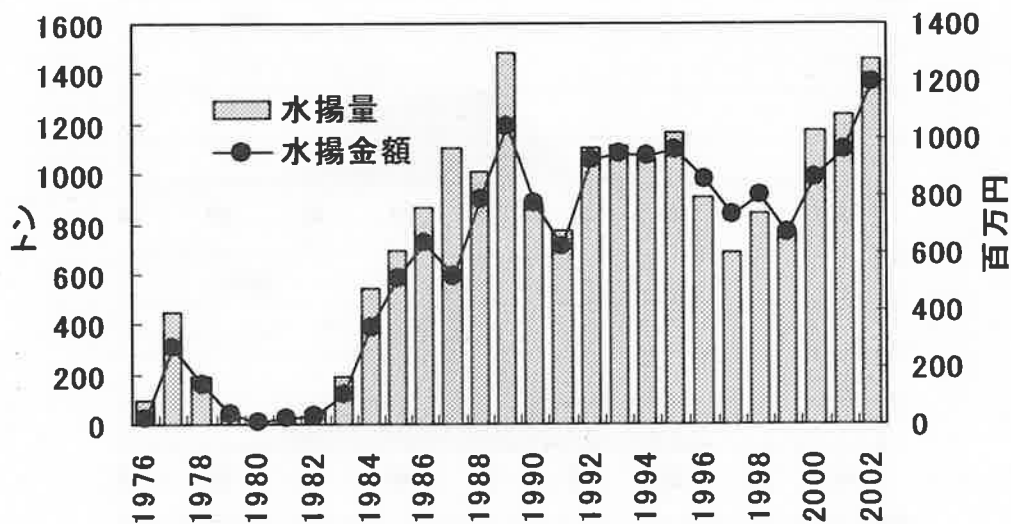


図1 キンメダイの水揚げ推移（室戸漁協）

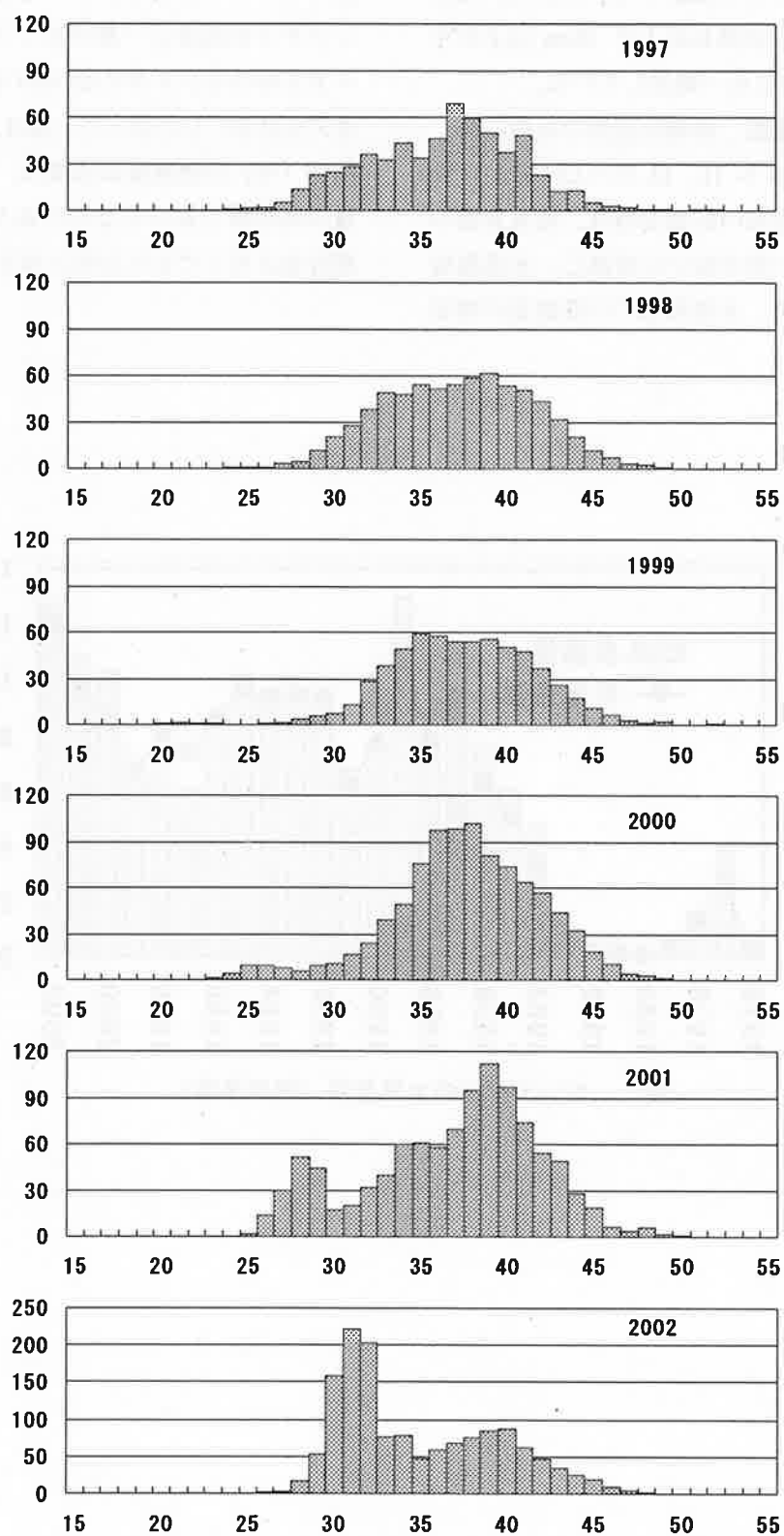


図2 室戸漁協に水揚げされたキンメダイの体長組成
横軸：尾叉長（cm） 縦軸：推定漁獲尾数（千尾）